

松井隆明(筑波大学・東京大学)

ウィーン学団を代表する哲学者ルドルフ・カルナップは、知的自伝の第 11 節「言語計画」において、記号論理と国際補助言語 (international auxiliary languages: IALs) という、2 つの異なる分野における言語計画に長年関心を抱いていたことを報告している (Carnap 1963, 67-71)。カルナップは 14 歳の時にエスペラントに出会って以来エスペラント話者であり、世界エスペラント大会にも 4 度参加している。エスペラント以外にも、ライブニッツ研究者で論理学者のルイ・クーチュラが推進したエスペラントの修正版であるイド (Ido) や、数学者・論理学者のジュゼッペ・ペアノが考案した無屈折ラテン語 (Latino sine flexione)、言語学者・哲学者のチャールズ・オグデンが開発したベーシック・イングリッシュなど、さまざまな国際補助言語に精通していた。カルナップはまた、国際補助言語をめぐる理論的問題にも関心を持っており、「世界言語の問題」(Carnap 1944) では、国際補助言語間の選択の問題を論じている。1946 年には国際補助言語協会 (International Auxiliary Language Association: IALA) のアンケートに回答しており、彼が自身の回答に添付した 38 頁にわたる長文のコメント “Additional Comments on the IALA Questionnaire 1946” も、近年、論理的経験主義のバーチャルアーカイブ (Virtual Archive of Logical Empiricism: VALEP) で公開されている。

本発表の目的は、これらの資料や他の関連テキストに基づき、カルナップのエスペラントや他の国際補助言語との関係を再構成することである。具体的には、次の二つの問いに答えることを目指す。

第一の問いは、「国際補助言語と記号論理学という、2 つの異なる言語計画プロジェクトに対するカルナップの関心はどのような関係にあったのか？」というものである。カルナップは、2 つのプロジェクトがそれぞれ異なる目的をもつことを認めた上で、両者のあいだに親和性があることも指摘している (Carnap 1963, 67, 71)。実際、カルナップ自身が指摘するように、カルナップ以外にも、ライブニッツ、クーチュラ、ペアノなど、多くの人が両プロジェクトに積極的に関与していた (Carnap 1963, 67, 71)。だが、2 つのプロジェクトは具体的にどのような点で親和的なのだろうか。

第二の問いは、「カルナップの国際補助言語との関わりを考察することは、彼の哲学を理解する上でどのような意義を持ちうるか？」というものである。カルナップが知的自伝の一節を言語計画に割いているという事実は、言語計画が彼にとって重要な位置を占めていたことを示唆している。また、Carus (2007) が強調しているように、「言語工学」ないし「概念工学」という考えは、カルナップの哲学において中心的な役割を果たしている。カルナップの国際補助言語との関わりを考察することで、彼の哲学について新たな理解を得ることは可能だろうか。

第一の問いに関しては、次のように論じる予定である。カルナップの 2 つのプロジェクトに対する関心の根底には、自然言語に関するある共通の考えがある。それは、〈自然言語は様々な目的に役立つ有用な道具であるものの、自然言語が十分適さない特殊な目的というものも存在し、そうした目的のためにはそれ専用の新たな道具を作った方がより効果的な場合がある〉という考えである。カルナップは、自然言語は高度な推論、概念や言明の

分析、国際コミュニケーションなどの目的には不十分だと考えており、記号論理や国際補助言語をこうした特殊な目的に特化した特殊な道具として考えていたのである。

第二の問いについては、国際補助言語に関するカルナップの見解を検討することで、しばしば「ユートピア的」と評される彼の言語観に現実主義的な側面もあることを明らかにする。本発表はまた、科学においてマイナー言語の話者が被っている不利益や、男性名詞を一般名詞として使用すること (generic masculine) に対するカルナップの懸念も光を当てる予定である。

参考文献

- Aray, Başak. 2024. “Metaphysics, Tolerance, and Language Planning: Carnap on International Auxiliary Languages.” In *Interpreting Carnap*, edited by Alan Richardson and Adam Tuboly, 214-33. Cambridge University Press.
- Carnap, Rudolf. 1944. “The Problem of a World Language.” *Books Abroad* 18 (3): 303-4.
- . 1963. “Intellectual Autobiography.” In *The Philosophy of Rudolf Carnap*, edited by Paul Schilpp, 3-84. Open Court.
- Carus, André. 2007. *Carnap and Twentieth-Century Thought: Explication as Enlightenment*. Cambridge University Press.
- Lins, Ulrich. 2022. “Sprache Transnational: Rudolf Carnap und die Esperantobewegung.” In *Logischer Empirismus, Lebensreform und die Deutsche Jugendbewegung: Logical Empiricism, Life Reform, and the German Youth Movement*, edited by Christian Damböck, Günther Sandner, and Meike G. Werner, 55-77. Springer.
- Matsui, Takaaki. forthcoming. “Carnap, Esperanto, and Language Engineering,” *Erkenntnis*.
- McElvenny, James. 2013. “International Language and the Everyday: Contact and Collaboration between C.K. Ogden, Rudolf Carnap, and Otto Neurath.” *British Journal for the History of Philosophy* 21 (6): 1194-1218.
- . 2018. *Language and Meaning in the Age of Modernism: C.K. Ogden and His Contemporaries*. Edinburgh University Press.
- 松井隆明. 2023. 「ウィーン学団の科学的ヒューマニズム——カルナップとノイラートを中心とした、論理実証主義の社会的・政治的コミットメント」、『Contemporary and Applied Philosophy』第 14 号、応用哲学会編、116-145 頁。